

＜コープ・ノース2018＞ 横田の機体、人道支援・災害救援を実践 *Yokota's airframes demonstrate HA/DR capabilities at Cope North*

March 1, 2018

By Airman 1st Class Juan Torres
374th Airlift Wing Public Affairs

米空軍横田基地のC-130JスーパーハーキュリーズとC-12Jヒューロンの乗務員たちは、2月11日から3月2日、グアムのアンダーセン空軍基地での「コープ・ノース2018」(日米豪3か国による合同演習)に参加している。

コープ・ノース2018で行われた人道支援・災害救援訓練で、2種類の航空機を用いた訓練の目的の一つは、航空医療搬送だった。

「米国では、航空医療搬送というとC-130がメインだが、太平洋地域や少なくとも横田では、主にC-12が担う任務だ。通常、1人もしくは2人の患者を運ぶためにC-12が出勤するが、大規模な人道支援・災害救援演習では、C-12が搬送できる人数以上の模擬患者が動員され、C-130Jを必要とするケースを想定して行われる」と、C-130J評価パイロットのケレー・ドルビー少佐は述べた。

今年の人道支援・災害救援のシナリオには、北部マリアナ諸島のテニアン島の模擬震災が含まれ、横田基地の乗務員たちが、将来起こりうる実際の緊急事態に備えられるものとなった。

「これらの仮想シナリオで、人々が必要とする物資を把握することは我々の使命だ。乗務員として、連携の取り方や航空機に担架や患者を乗せる手順の知識を得ることができた」とドルビー少佐は述べた。

横田のC-130J乗務員たちにとっては、航空医療搬送を多国間で行うことは稀な機会だったが、C-12の乗務員たちにとっては横田でもよく実践している任務だ。コープ・ノース2018は、C-12の乗務員たちが地域内のパートナーたちと実践能力を強化する機会となった。

「コープ・ノース2018は、同盟国との相互運用性を高めるだけでなく、航空機搬送の任務で示された医療対応手順の理解を深めるためにも欠かせない。将来的により多くの患者を助けられるようになるための、他のメンバーから学ぶ訓練の場となる」と第459空輸中隊C-12任務指揮官レーン・リデル少佐は述べた。

コープ・ノースは、1978年に三沢基地で四半期に一度の2か国間の演習として始まり、1999年に拠点をグアムに移した。今日、毎年恒例に行われている同演習は、地域の軍が重要な即応技術と相互運用性の強化を図りながら、インド太平洋地域の安定と安全を促進する機会となっている。



2月19日、北マリアナ連邦のロタ島にて。コープ・ノース2018で、患者を搬送するために担架を固定する第349航空医療搬送中隊の空兵たち。コープ・ノースは、米軍と同盟国が人道支援と災害救援に備え、また自然災害の被害を復旧させるための訓練を行う。